

# 昔がたり (六)

あ ざ み

外國先生御歸國後、一時秋風落莫の感があつた我々の世界も、しばらくして我々の先輩の方が舶來してかへつて來られた事に由つて又新しい空氣が漲つた。卒業生團體の同聲會が生れたのもこの折である。同聲相和するは自然の理だとか何とかで、皆が仲よくして道の爲につくさうといふわけであるといふ。發會式とも見るべき演奏會は中々盛會で、新歸朝の御方のオリンコンセルトやヴァーカル、ソロや又他の方々の色々が出品された。同聲會はそれから年に二回の演奏會と一回の總會と折々の親睦會とで長く盛であつた。

(話は一寸ちがふが、其頃文壇の或團體に「どうしよう會こ  
うしよう會」といふのがあつた。どうしよう會といふのを  
開く時には、めいめいが、どうしようかい?と思ふ案を宿題  
に出す、そして其翌月位に、こうしよう會といふのを開いて

先の宿題に就いてめいめい考へた處を、こうしようかい?  
といつて答案を出す、色々の答案の中からまさにこうしよ  
うといふのを撰んできめるのださうだ。それでよく我々の  
同聲會も、どうせい!のこうせい!のと命令的な名だとい  
つて笑ふ人もあつた。)

我々の昔なじみのピアノはアメリカの何とか會社のフリユ  
ーゲルであつた。かなり年をとつてはゐたがそれでも會の折  
毎よく忠實に演奏者を紹介してゐた。私はこのピアノに大き  
な尊敬を払つてゐた。何年の事であつたか、新しいブリュ  
ーナのフリユーゲルが据ゑらるゝ事となつたので其前から  
其うはさばかりしてゐた。それが恰も演奏會の前日到着する  
といふので、其會に出演する人々をして一入驚喜せしめた。  
奏樂堂の隅、床を大きく四角にとりのけて天井近く櫓が組み

立てられ車井戸の様な仕掛で下の室からピアノを釣り上げる準備も早く成つて唯々ピアノの到着を待つてゐた。あまりの待ち遠しさに誰やらが上から綱にすがつて下の室へをりたのを初めとして追々にいたづらがはじまる。裏庭から石炭はこのの筈を持つて来て綱にしつかり縛し色々の物を入れて合圖をすると上にゐる人が、ドッコイ／＼などいひながらくり上げる、そんな事をしてゐる中に今度は其筈の中へ新聞紙を布いて座つた人がある、上の人等は力を合せてひきあげる、重いのでともするとズル／＼とずり下りさうになるのをやう／＼ひきあげる、階上の床に達した時、横に直つて居た人がすばやく床へ引き据へた。それから皆が面白がつて順々に、「ぎるベートル」をした、重いのもや軽いのもある、くりあげ役は「これは罪が重いぞ」の軽いぞのと、勝手の事を云つてゐる。釣られ人は、「天井まで釣り上げてはいやだキャー／＼ワア／＼といつてさわいでゐた。或方が「一寸此人を入れやう、きつと恐がつて面白いから」、といつて私を追ひかけた。泣きさうになつてあやまつてゐる時、嬉しやピアノ御到着！ピアノ

ノはこはがりも何もせず泰然自若として箱入のまゝ釣り上げられた。箱を開かれ、足をつけられて舞臺の上に悠然とその雄々しき姿を横たへた。拍手喝采の音！ふとかたへを見るとあの老いたピアノが昔ながらに立つて居る、西の窓からさし入る午後の光をうけていたましい姿でたつてゐる。嗚呼せめて明日今一度此ピアノを引き此ピアノをして最後の光榮あらしむる人はなきやと思ひはしたが。』

（あざみは我儘者である、もういやになつたからやめるといふ。實は先からいやになつてゐたのをがまんして書いてゐたのだが、其がまんももういやになつたのだといふ、我儘者、勝手にしろ、それで此物語はこれで「完」とする。（どこかの附記。）

【入力者注】底本と行を合せるために、フォントサイズを小さくしたり、半角スペースを挿入した箇所があります。

底本…東京音楽学校校友会「音楽」第二卷第十二号

明治四十四(1911)年十二月十日発行

入力…小林 徹

公開…令和四(2022)年十一月六日

橘系重【[散文作品集](#)】に戻る。